しずおか新聞感想文コンクール

入選　小学生の部

日々努力する飼育員達

原田（はらだ）　耀（ひかる）さん（静岡葵小5年）

ぼくは、動物や昆虫が大好きです。この記事を選んだ理由もレッサーパンダやオオアリクイの記事が載っていたからです。今年の夏休みも日本平動物園へ行き、いろいろな動物を観察できて、楽しかったです。とても暑い日だったので、レッサーパンダはエアコンがついている部屋でも暑そうでした。動物園や水族館は、いろいろな生き物が見られる楽しい場所です。

この記事を読んで飼育員さん達のたくさんの努力を知りました。いつも見ている動物達の繁殖が難しいことや生息地に近い環境を再現するための「行動展示」を導入していることです。

オオアリクイの国内での飼育数は計十五匹しかいません。アリに代わるえさの確保が難しいそうです。えさが確保できないとオオアリクイの健康にかかわる大問題です。ぼくはもっと簡単にえさを準備することができると思っていました。飼育員さん達は日々努力していてすごいなと感じました。

ぼくは、「ハズバンダリートレーニング」という言葉が気になり調べてみました。「日本語訳は受診動作訓練。動物園や水族館で安全で健康的に飼育するための健康管理。緊急時の治りようや投薬がしやすい体勢を取ることを覚えさせる」と分かりました。動物にストレスがなく、動物と飼育員さん両方の安全を確保するため飼育員さん達が日々努力をしていることが分かりました。

心に残った文章があります。柿島安博園長の「動物園は見せ物小屋ではない。いかに動物が幸せに暮らせるかが課題」です。ぼくも同じことを考えていました。生息地に近い環境を再現したり繁殖管理を行うことは、動物達にも飼育員さんや動物園を訪れるぼく達にとってもとても大切なことだと思います。

動物園や水族館に行く時は、この記事を思い出しながら、動物達とふれ合いたいと思います。

こんな大人になりたい

古沢（ふるさわ）　春（はる）さん（静大付属浜松小6年）

私は「こんな大人になりたい」と感じる人を、新聞記事の中から見つけた。

その人は、白川優子さん。国境なき医師団の看護師だ。白川さんは、7才の時に国境なき医師団の活動を知り、それがきっかけで国境なき医師団を目指した。白川さんが、仕事をしてきたイラクやシリアは、今でも紛争が続き、危険な地域だ。私は、「自分が危険な中で、紛争で傷ついた人々を助ける時、どんな気持ちなんですか」と、白川さんに聞いてみたくなった。

私の夢は、「アフリカに行き、ゴリラのコミュニケーションについて研究すること」だ。この記事を読んで、この夢にプラスして、難民支援などもやってみたいと感じた。

難民支援は大変な仕事だし、危険なこともあると思う。白川さんの言葉の中に、「ずっとふさぎこんでいた女の子が帰国直前に笑ってくれた」というエピソードが書かれていた。私もそんな笑顔が見てみたい。

どちらの夢もかなえるために必要なのは、「語学」と「コミュニケーション能力」だと思う。白川さんは、日本人についての課題は「英語の壁」だと言う。私は英語はもちろん、研究に行く現地の言葉もマスターしたい。来年中学生になり、本格的に始まる英語の学習が楽しみだ。

記事の中に、「日本の平和はキープする努力が必要」という言葉がある。私はこの言葉が心に残った。この言葉から、私一人で出来る平和への努力は、「たくさんの文化、考えをしっかりと理解すること」だと考えた。相手を理解することは平和への第一歩のはずだ。「私も、白川優子さんのようなステキな大人になるぞ！」と、この記事を読んで心にちかった。

入選　中学生の部

無知から学んだこと

加藤（かとう）　優佳（ゆうか）さん（浜松開成中1年）

しまった！と思った。良いと思ってやったことなのに…私の家では、八年前からメダカを飼っている。何気なく新聞をめくっていたら〝品種改良のメダカ、野生種脅かす〟の文字が目に入ってきた。興味が湧き読んでみると、私は大変なことをしてしまったのだと後悔することになった。

メダカは、「そもそも放流するべきではない」そうだ。八年前、祖父からメダカをプレゼントされ、初めは、猫や他の大きな魚に食べられる心配もないし、定期的にエサももらえるし、川で生きている魚よりウチのメダカは幸せだな、と勝手に思っていた。日が経つにつれ、狭い水槽の中で窮屈そうだなぁ、もっと広い所で自由に泳ぎたいだろうなぁ、と思うようになった。そして、私は…やってしまった。家の近くを流れる川へ、メダカ放流。数日間は、きっと今ごろ気持ち良く泳いでいるだろうなぁ、なんて呑気に思ったりもして。

メダカを放流したことを祖父に話すと、すぐに他の魚に食べられるな、と言われ…少しの罪悪感と、がんばって生きてね、と案ずる気持ちになった。

そして、目に入ったのが今年七月十五日付の記事だった。気になったのでネットでも調べてみることにした。

新聞に書かれていたようなことが載っていた。パッと開いた瞬間、〝メダカの放流が絶対にNGな理由〟の文字。読んでみると、やはり書かれている。近くの川や池に放流するのは生態系を崩す恐れのある危険行為である、と。野生の純血種と交雑することで、交雑メダカが増えていき、最終的には純血種がいなくなってしまう。純血種が減るということは、自然環境の変化に適応してきたメダカの遺伝子情報そのものが失われる可能性が高くなり、自然環境の変化を分析するための貴重な資料が少なくなる。私たち人間の生存環境を守ることにも直結する重大な問題である、と。そしてダメ押しのように〝放流前の環境を取り戻すことは難しい〟の文字。最後の一文は〝最後まで責任をもって育てる覚悟を持ちましょう〟だった。

半分以上は放流したが、数匹は理科の勉強にもなるから、という理由ではあったが、手元に残っている。メダカは共食いをすることがある、と聞いたことがあったので隔離してみたら、二週間位した頃、とてもかわいい稚魚を発見。通るたびに寄ってきては口をパクパク。日に日にハッキリ分かる程に成長していく。すごく大事に育てているのに、死んでしまう稚魚もいた。日光の当たる場所がいいのか？水の入れ替えの回数は？エサはどのくらいあげたらいいのか？いつの間にか、メダカの成長がすごく気にかかるようになり、元気に泳いでいる姿を見ると嬉しくなった。生態系うんぬんも大事だが、単純に最後まで見守りたいと思うようになった。

持続可能な社会にするために

沢米（たくまい）　梨々子（りりこ）さん（浜松曳馬中2年）

「ほら、行くよ」

母が私に言う。たまに行くスーパーマーケットへのトレーなどのリサイクルボックスに行くのだ。大きな袋を持ってスーパーマーケットに行き、トレーや牛乳パックなどに分ける作業は何だか恥ずかしい気持ちになるので好きではない。しかし母はそれをやめることなく続けている。私はある日、興味深い新聞記事と衝撃的なニュースを見た。それからは「恥ずかしい」という気持ちはどこかへ行ってしまった。

私が興味深いと思った記事は環境についての日本の取り組みを紹介するイベントが国連本部で行われたという新聞記事だった。日本はより良い地球環境にするために積極的に活動しているということがわかり誇らしく思った。もう一つ私を変えるきっかけとなったのは海洋プラスチックごみ問題のニュースだった。海岸沿いいっぱいにプラスチックごみがある様子はとてもひどいものだ。この問題に対して世界的にどんなことを行っているのか調べてみたところ、SDGsという大規模な目標が見つかった。SDGsとは持続可能な開発目標という意味で二〇三〇年を年限とする十七の国際目標を掲げている。この先も地球でいい暮らしができるようにするために国際的に協力することはとても大切なことだと思う。海洋プラスチックごみ問題もSDGsの中の一項目だということがわかった。さらに日本ではどのような取り組みをしているのか調べてみると、高齢化への対応やイノベーションを生む教育などその他数種類に貢献していることを知った。そして「ジャパンSDGsアワード」というSDGsの達成に向けて、優れた取り組みを行う企業を表彰するということも行っていることがわかった。それによってSDGsへの関心を高められると知り、とてもいいアイデアだと思った。そして新聞記事の一部の神奈川県の「プラごみゼロ宣言」のように県で大きな目標を掲げている県があることを知り、今後このような目標を県や市で掲げて達成していくことが日本の環境問題への関心を高めることに繋がっていくと思う。

この新聞記事を読んだことで環境を守るために日本が積極的に活動していることがわかり、自分たち一人ひとりがもっと環境に優しい生活や、できることをしていかなければならないと感じた。振り返ってみると学校の牛乳パックも洗ってリサイクルしていて、小学校時代の雑紙回収もリサイクルだ。そしてはっとした。いつも母がやっていたことは環境のことを考えてのことだったということに。何気ないことだけれどできることを行う、その大切さに気づき私も環境のことを常に頭の片隅において生活したいと思った。

入選　高校生の部

あたりまえが〝あたりまえ〟になったこと

奥村（おくむら）　実矢（みや）さん（浜松西高1年）

「深い反省」

私は、大きくかかれたこの言葉に強く惹かれた。およそ三一〇万人の方が犠牲となり、多くの人に不安と絶望をもたらした大戦は、数ある日本の歴史の中で一番大きな出来事といっても過言ではないだろう。「多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき」という天皇陛下のお言葉からもわかる通り、戦時中だけでなく、戦後も大変だったと小学生の時に社会の授業で習ったのを覚えている。私は、生まれてから十六年、戦争を経験することなくここまで生きてくることができた。これはまぎれもなく、平成という時代を担ってきた大人達と、大戦で失われた尊い命のおかげだと強く感じる。今の時代が平和なのは、過去があるからだということを絶対に忘れてはいけない。

「戦争なんてものはやるもんじゃないよ。」

そう私に伝えてくれたのは、八十八歳のおばあさん。十四歳で終戦を迎えた彼女は、戦争を知らない私に様々なことを教えてくれた。彼女の口から語られる言葉一つ一つに私は驚き戸惑いをかくすことができなかった。学校の授業で習ったときにはかんじなかった規模の大きさ、予想を超える被害の大きさ。戦争というものがどれだけ悲惨で残酷なものなのか、私は衝撃で胸が砕けそうだった。

おばあさんは、私の目をみて何度も何度も〝戦争〟のおそろしさを伝えてくれた。「戦争なんてやるもんじゃないよ」時に涙ぐみながら何度も伝えてくれるその言葉は教科書からはわからない、平和への思いを強く感じた。

「命の価値」という言葉があるのなら、その価値は、昔も今も変わらないはずだ。なのに、人が人を殺すことがこの日本でおこなわれていたことがあるということ。それは日本にとって、この素晴らしい日本にとって、最大の汚点ではないかと思っていた。しかし、今回おばあさんからお話をきいて、戦争があったから、今があるのだと確信した。今、すごく平和で毎日が人の笑顔につつまれていることの日常を日本が手にいれることができたのも一度どん底まで落ちているからだと気がついた。この平和の時代がつづくこと、それは、戦争があって今があるということ。皆で笑ってすごすことができるこのあたり前の日々を絶やさないということが戦争の惨禍を後世に伝えることにつながるのではないか。

「戦争の惨禍を二度と繰り返さない」

この思いは、国民全員が持ちつづけることが大切だと私は思う。家族で誰も欠けることなく食卓を囲めること。ふり向けば笑顔があること。このあたりまえが〝あたりまえ〟になったことに喜びと、感謝を忘れずに生きること。それが今、私たちができることだと、私は強く思う。

「幼保無償化」について

小倉（おぐら）　明希菜（あきな）さん（浜松市立高2年）

二〇一九年十月、消費税増税に合わせて幼保無償化が実施される。これは、子育て世帯の支援を狙いとし、幼稚園や認定こども園の教育費、保育園の保育料が補助される国の対策だ。実施の背景には、「高額な教育費が少子化の原因の一つになっている」ことや、「子育て世代の教育費負担を減らすことで、どんな家庭の子供も教育を受けることができる」などの理由が挙げられている。しかし、幼保無償化とはいうものの、助成される金額に上限が設定されており、教育費の全てが完全に無料になるわけではない。

この記事を目にした時、私は素直に嬉しかった。私には一歳の弟がいる。もちろん、弟は幼保無償化の対象者だ。三人兄弟で大変な中、両親の負担が少しでも減るのであれば、実に嬉しいことだ。しかし、幼保無償化よりも先にやるべきことはないだろうか。保育士の待遇改善。教育の質の向上。そして、待機児童問題の解決。待機児童が増え続けているということは、施設が不足しているということ。今、無償化しても、利用できる施設がなければ意味がないのだ。優先順位を誤れば、「何のための無償化なのか」が分からなくなってしまう。

少子高齢化が問題とされる現代の日本で、一刻も早く待機児童の問題を対処すべきだと考える。待機児童問題が改善されることのメリットは大きい。「少子化対策」「女性の活躍による貧困の解消」「世帯収入の増加による消費活性化」「納税者が確保されることによる税収の増加」その他にも、多くの利点がある。それにもかかわらず、先に無償化を進めている。無償化の目的は少子化を食い止めることでもあるが、大切なことを後回しにしては、結局何も得られるものはない。

幼保無償化の施行が決まっている今、私たちにできることは、待機児童の問題を自治体や世間に訴えていくことだと思う。待機児童の問題はこれからさらに深刻になっていくだろう。その前に改善されるように訴えていかなければならない。

私が通う学校では、総合的な学習の時間に、「浜松市への政策提言」の活動を行っている。こうした活動を通じて、少しずつでも高校生の私たちができることをしていきたい。また、私たちがこれから歩んでいく「社会」に対する理解を深めていきたい。私は将来、教師になるのが夢だ。今後、様々な活動に積極的に参加し、教育業界を取り巻く環境について深く学んでいく。そして、教育者として社会に貢献できる人材になりたいと考えている。